

石見銀山につづく山峡の石造アーチ橋（1）

—飯南町頓原の築立暗渠—

高橋 悟 昌子 怜太

今日、島根県内に確認されている石で造られたアーチ橋即ち、石造アーチ橋は10橋に満たなく、九州各県に比べ非常に少ない（文献1）。そのように少ない中、4橋が世界遺産である石見銀山に存在する事から「石見銀山の石造アーチ橋を探る」と言うテーマのもと、これまで石見銀山の石造アーチ橋について検討してきた（文献2, 3）。これら4橋の石造アーチ橋の存在場所は江戸時代において幕府支配の天領、つづいて明治に入り大森県、浜田県、今日の島根県と県名が変わる中、郡役所・警察・裁判所などが置かれ、石見東部の政治経済の中心地として存在した鉾山町大森にあり、当時としては比較的開けた場所に建設された石造アーチ橋と認識できる。島根県内に確認されている他の残りの石造アーチ橋は明治期以降、中国山地の山峡地に確認されることから、これらの石造アーチ橋を石見銀山につづく山峡の石造アーチ橋と位置づけ、その存在の意味などについて検討を行なおうとした。

石見銀山につづく山峡の石造アーチ橋の一つ目として1885（明治18）年～1886（明治19）年の建設と言われ、島根県飯南町頓原に存在する図-1

に示す「築立暗渠（カルバートとも呼ばれる）」と言われる石造アーチ橋の検討を行った。暗渠（カルバート）とは橋の構造形式による分類で「溝橋」に分類され、鉄道・道路の下を横断し、土やその他の荷重を支えるように設計された内腔構造物（文献4）で、流水を通す農業用、用排水路としてよく利用される。そこでまず、石見銀山の石造アーチ橋を探る（1）、（2）で明らかになった事、今回の築立暗渠が建設された明治時代初期の島根の状況、道路行政の流れを基に、築立暗渠の特性、さらには、なぜ「築立」と呼ばれたか、なぜ中国山地の飯南町の山峡の地に作られたのか、なぜ形式として石造アーチで作られたのか、石造アーチの技術はどのように取り入れられたのか、などの点から築立暗渠（カルバート）を検討し、その結果次の事が明らかになった。

1）築立暗渠は木と石しか使用できない橋作りから近代的橋作りへの過渡期の橋で石材の利点を有効に活用した橋（暗渠）である。

2) 「築立」と呼ばれたのは土木用語の一つで、頓原迫地区で行った作業、いわゆる「築堤工事において盛り立て土を所定断面に仕上げる」そのものの名称「築立」を暗渠の呼び名につけたものと見られる。

3) 中国山地の山峡の道路建設に築立暗渠が作られたのは新設の盛土道路が小才田の谷を流れる小川を横断し、堤の堤体の様になり、洪水時、ため池の破堤災害と同じ災害が想定されるため、災害を未然に防ぐために作られた。

4) 築立暗渠に石造アーチ形式が用いられたのは石材は風化に強く、圧縮力に非常に強いと言う利点を持つことから圧縮力だけの石造アーチ構造とすることで土圧にも強く、堅牢な作りの橋（暗渠）が期待された。

5) 築立暗渠の建設は田川暗渠の建設工事を見習って行われたものとみられ、施工は藤田組が行ったものと推察された。又、築立暗渠建設当時の島根県の土木技術は相当高いレベルにあったものと推測される。

飯南町頓原迫にある築立暗渠について検討してみると構造的に多くの特性を有している事はもちろんであるが、地方の明治期の時代の流れも知られ、多面的に興味深い。ただ単に近代化遺産として見るだけでなく、町おこし、郷土教育の教材として活用していくことが今後重要で、築立暗渠の近くには道の駅もあることから晴雲トンネルなどを加え、明治初期の尾道街道と現在の尾道街道の比較、周遊コースとして道の駅を核にして作っていくのも面白いと思われる。

なお、内容の細部について興味のある方は現在投稿中の「郷土石見」の内容をご期待ください。



築立暗渠の内部



築立暗渠の場所